



2026 年 10 月
第 778 号

日本基督教団 平塚教会
発行人 平塚教会
編集人 日下部 明美
〒254・0045 平塚市見附町 6・18
電話 0463(32) 8831



社会の公器・平塚教会

平塚教会 北川一明

私があなただちを捕囚として送った町の平安を求め
その町のために主に祈りなさい。その町の平安があ
ってこそ、あなただちにも平安があるのだから。

(エレミヤ二九・7)

英語では礼拝をワークショップ・サービスといいます。
教会とは、第一に、礼拝という務めをもって神に奉
仕(サービス)する場所です。第二に、教会は地域
の人々にサービスを提供する拠点です。

奉仕するのは、天国の国籍を奉仕で買い取るため
の取り引きではありません。善人になるためでも、
神の恵みに義理立てしてでもありません。神の永遠
の御業に参加するためです。

神の働きに参加させていただくことで、私たちは
目先の損得から自由になります。世俗の思い煩い

からも距離を取れます。奉仕は、神を信じる本人を自
由にし、魂の平安を与えてくれるのです。

「神の御業への参与が自分を幸せにする」という
ことは、信仰を学ばなければ理解できません。

礼拝も学びの機会になります。しかし礼拝は学習
会ではありません。神を崇め、拝するのが礼拝です。
学びを優先すれば、かえって神への畏れや敬いが失
われる危険があります。

そこで教会は、系統立てた学びを大切にしてきま
した。聖書研究祈禱会やバイブル・リトリートなど
です。信仰の交わりも、信徒が互いに学び合う大切
な機会です。さらに、こうした教会発行の文章も、
信仰の学びを促します。

ところが「現代人は忙しい」と言われ『おとずれ』
もなかなか読めないと聞きます。修養会など、研修
の機会も作りにくくなりました。その中で、信徒同
士の交わりだけは残っているでしょうか。

ただ現代は、交わりを学びの場にするには新たな

《 目 次 》

社会の公器・平塚教会

牧師 北川一明・・・1

「初めて」の気持ちを思い出して 平塚二葉幼稚園 長塚 百枝・・・3

編集後祈

・・・4

課題が生じています。

かつては「教会は仲良しサークルではない」という自戒の言葉は教会の常識でした。交わりの中で、繰り返し聞かされていたからです。

そのころの交わりは、互いの信仰を確かめ合う切磋琢磨の場という側面がありました。時に厳しく互いを問い直し合ったものです。先輩信徒の助言は後輩にとっては襟を正さざるを得ない厳しさがありました。

今はどうでしょう。個人の学びが十分だと、人には形式的なことしか注意できません。それに加えて、他人の心に踏み込むことを避ける時代です。互いに不快な思いをさせないことが優先されがちです。交わりは、次第にただ快適さを得るためのものになっていきます。

世に安心できる場、快適な居場所が必要です。教会には、世に居場所のない人に居場所を提供する役割もあります。教会に來る最初の動機は「個人的な安らぎを求めて」というので当然です。しかし、

ただ安心・快適な居場所は「仲良しサークル」です。

魂の平安を求めて教会に來た人たちが、教会の信仰を見て、やがて自分が奉仕を提供する喜びに目覚めてゆくのが本来の教会です。魂の平安は「自分本位」という呪縛から解放された先にあるからです。

信仰を正し合う文化が失われた昨今、多くの教会が「仲良しサークル」になる危機に陥っています。本来の教会の信仰を取り戻さなければ、教会としての意味がなくなります。

教会の軌道修正は、命令や強権によってはできません。礼拝出席も献金も奉仕も、自発的であるのが信仰です。命令によって人が動くのでは、それも本来の教会とはいえません。

教会の意思決定を担う「現住陪餐会員」が、強いられてではなく、自発的に教会を正していくしかないのです。

コロナ前の二年間、平塚教会の総会で

は、現住陪餐会員みなで「社会の公器・平塚教会」を標語に掲げて活動することになりました。オーブンチャーチを行い、クリスマス燭火礼拝ではプロの歌唱者を招きました。

社会の公器であろうとすれば、仲良しサークルではいられません。外への奉仕は、神と人とに仕える喜びを実感する機会になります。信仰の実践的な学びの場にもなります。「社会の公器」は一石三鳥または四鳥を狙ったものです。喜んで奉仕する教会員を見れば、奉仕を受けた外の人たちも「人に仕える尊い喜びを自分も味わいたい」と仲間に入ってくれりかもしれません。

地域に知られ、地域の人に必要とされる教会を、神は喜びになるでしょう。教会員も自信を得て信仰の喜びが深まるでしょう。しかし内輪で快適に過ごすことを第一にする教会には、別の結果が待っています。高齢化の現代「別の結果」は容易に想像できます。

「初めて」の気持ち

思い出して

平塚二葉幼稚園

長塚 百枝

今回、幼稚園の研修旅行として、韓国・チェジュ島へ行ってきました。初めは「旅行ではなく研修!？」と少し戸惑いましたが、普段の旅行とは違った視点で、韓国の幼児教育に触れられることを楽しみにしていました。



2日目には、「ボモク教会」と「ボモク保育園」を見学しました。二葉幼稚園の卒園生のお母様が現在チェジュ島に住んでいらっしゃるご縁から、現地を案内していただきました。

ボモク教会では、幼稚園生から高校生まで、キャンプやダイビング、海外へ出かける活動など、さまざまなプログラムを行っているそうです。楽器の

練習ができる防音室や、讃美歌を練習する部屋、シャワー室など、子どもたちが活動を楽しめる設備も整っていました。「子どもたちが楽しいと思える場所だからこそ、自然と人が集まり、長くつながっていく」というお話が印象に残りました。

その後、ボモク保育園を見学しました。韓国は大学進学が難しく、幼い頃から勉強をしているというイメージを持っていた私ですが、実際の保育園では、子ども一人ひとりの声に耳を傾けながら、のびのびと過ごす姿がありました。絵の具遊びやクッキングを楽しみ、子どもたちの写真を見せていただき、二葉幼稚園の子どもたちの姿と重なる部分もたくさんありました。国や言葉は違っても、子どもたちの「やってみたい」を大切にし、成長を願う気持ちは同じなのだと感じました。

そして今回、私自身にとって大きな学びとなったのが「乗馬体験」です。チェジュ島で有名な乗馬を選んだ理由は、「やったことがなかったから」。せっかくの研修旅行だからこそ、普段な

らないことに挑戦してみようと思いました。

「初めて訪れる場所で、言葉も違う中、今までやったことのないことに挑戦する。」それは、初めて幼稚園に来た子どもたちの気持ちに少し近いのではないかと思ったのです。

実際に乗ってみると、想像していたよりずっと大きな馬。揺れる背中に、初めは「怖い!」という気持ちでいっぱいでした。たどたどしい韓国語で「怖いです」「足が痛いです」と伝えても、返ってくるのは「ウン、ダイジョブ、マエムイテ(うん、大丈夫、前向いて)」。本当に大丈夫なのかなと、手に汗を握りました。

それでもしばらくすると少しずつ慣れ、きれいな海や畑の景色を見る余裕も出てきました。乗馬を終えたときには、「ドキドキしたけれど、馬に乗れた!」という達成感と、「やってみたら意外と面白かった!」という嬉しさが残りました。

海外では、バスに乗ることや食事を

注文することなど、日本では当たり前前にできることも「初めて」の連続です。翻訳機で調べた言葉を使い、ドキドキしながら話して、それが伝わったときには、小さなことでも大きな達成感がありました。



普段、子どもたちと関わる中で、私たちはどうしても「教える側」になります。でも今回、自分自身が「分からない」「怖い」「どうしよう」と感じながら挑戦したことで、子どもたちの気持ちを改めて考えることができました。

子どもが何かに挑戦しているとき、大人はつい手



を出したり、先回りして手伝ったりしてしまいます。

でも、「自分でやってみる時間」の中には、子どもにとって大切な経験がたくさん詰まっているのだと思います。「大丈夫だよ」と見守り、できたときには「できたね!」と一緒に喜ぶこと。その積み重ねが、次の「やってみよう」につながっていくのではないかと改めて感じ



ることが出来ました。

今回のチェジュ島研修旅行で感じた「初めて」のドキドキと、「できた!」という喜びを忘れず、これからも子どもたちの「やってみよう」という気持ちを大切にしていきたいと思っています。



《編集後折》

ご在天の父なる神様、おとずれ第778号の発行を感謝します。

今年もあと三か月ですが、年々自然災害が多いと思いますが皆様の健康と奉仕をお守り下さい。
幼稚園の先生の済州島の研修を守り導いて下さったことを感謝します